エディット・シュタインにおける経験的人の構成について

上智大学　中川暖

はじめに

本論文では、エディット・シュタイン(Edith Stein, 1891-1942)における「経験的人の構成[1]」に着目する。およそ「経験的人(empirische Person)[2]」とは、身体を具えた感覚し、思考し、感じ、意志する「自我(Ich)」を有する現実に生きている「人(Person)」を意味し、経験的領野に属する「人間(Mensch)」を示している。しかし、シュタインは、経験的人の分析を初期現象学期(1916-1922)の様々な著作の中で考察しつつ、それに伴って経験的人を様々な術語で示しているために、経験的人に関するシュタインの考察は明瞭であるとは言えないであろう。シュタインの博士論文『感情移入の問題について』(ESGA5: 1916-1917)の第三章では、経験的人を「心理物理的個体(psychophysisches Individuum)」において主題的に考察している。更に、1920年のブレスラウでの講義を基に編纂された『哲学入門』(ESGA8: 1920)では、経験的人を「自我生命(Ichleben)」という術語において取り挙げている。そこで問題となるのは、シュタインが両著作間の移行において、経験的人における「感覚身体」と「純粋自我」の関係性を僅かに変更しているように考えられる点である。

そして、シュタインが経験的人を「構成(Konstitution)」の分析において考察していることは、初期現象学期のひとつの特徴であると考えられる。先行研究では、シュタインにおける構成概念は、基本的にフッサールの「現象学的構成(phänomenologische Konstitution)」を継承したものとして考えられてきた。しかし、シュタインの考察は、必ずしもフッサールの超越論的現象学の構成論と一致しているとは言えないように思われる。本論文では、シュタインの現象学的方法論において中心となる現象学的構成に着目しつつ、経験的人の在り方を再検討することを目的とする。

本論文では、以下のように議論を展開する。第一に、現象学的構成論に関するシュタインの立場を吟味しつつ、経験的人の分析で試みられる構成問題を提示する(1.)。第二に、『感情移入の問題について』における心理物理的個体の分析から、感覚身体と純粋自我の関わりに着目し、心理物理的個体の位置づけを再検討する(2.)。第三に、『哲学入門』における自我生命の分析から、感覚身体と二つの位相を有した純粋自我の関わりに着目し、自我生命の位置づけを再検討する(3.)。

1．現象学的構成論に関するシュタインの立場を巡る問題

本節では、シュタインにおける現象学的構成の立場について吟味することで、経験的人の構成分析がどのような観点で行われているのかを問題提起する。フッサールは現象学的構成の問題を「いかなる対象領域もみな、意識と相即して、構成される」(Ⅲ/Ⅰ：344)という仕方で、「原本的に体験する意識の枠内における事物構成の様々な段階と層によって、本質的に規定される」(Ⅲ/Ⅰ：352)と述べる。すなわち、フッサールの構成問題は、超越論的意識に即して様々な対象領域が、いずれの段階や層において或る固有の統一によって存立しているという超越論的現象学の試みによって見出される。そこで着目したいのは、『イデーンⅡ』において特徴づけられるような「有心的自然の構成」、すなわち「心は身体の実在と結合ないしは組み合わされた実在として構成されている」(Ⅳ：93)という分析である。それは実在的因果性に支配される心と身体を具えた「自我-人間(3)」がいかにして意識によって構成されているのかという分析である。しかし、フッサール現象学の構成概念がこれまで様々な解釈の方向性を孕んできたことは周知されている。現象学的構成の立場に関するザハヴィの指摘を参照すれば、構成分析は「観念論」と「実在論」の解釈において対立していることが窺える(ザハヴィ, 2017: 109-110)。このような解釈状況の中で、シュタインが構成分析に関してどのような立場を取っていたのかを吟味することは必要であろう。

先行研究では、シュタインにおける現象学的構成は、フッサールの「超越論的観念論」との関係性において解釈される傾向にあった(Hecker, 1995: 20-32)。確かに、シュタインは、現象学の目標が「純粋意識の内在的所与の中で超越論的対象の構成が達成されること」(ESGA5: 53-54)という超越論的観念論における構成分析に言及している。つまり、現象学は、対象が構成される純粋意識の在り方を解明することに向けられているということである。このような探求が可能になるのは、「現象学が扱う純粋な体験は、心理的状態ではなく、人間的な個人の状態でもない。人間と動物、そしてすべての精神的状態、身体的状態は、実在(real)世界に属しているが、《現象学的還元》によってそれらは遮断される」(ESGA8: 20)からである。もちろん、シュタインはこのような現象学的還元の態度を通して、自然的態度において一般的に定立された実在的なものが遮断されるというフッサールの構成分析に関する超越論的な観点を踏まえている。しかし、シュタインは、構成の問題が解釈上、観念論と実在論の対立を有していることを分析している。

〔1〕我々は、ここでフッサールの『イデーン』における観念論的立場を正当化するのに役立つ議論を取り上げることができる。すべての存在には、必然的な方法として経験可能な存在ないしは認識可能な存在がなければならない。すなわち、いずれの存在には、それが構成される(sich konstituieren)ための意識が観念的に対応している。観念的とは、すなわち、まさに相応しい認識や経験に対して実在化する顕在的意識が現に存在しなければならないと言うわけではない。一般的にはそのような意識が眼前に存在する可能性があれば十分である。数学の公理が成り立つためにそれが実際に洞察される必要はないが、それは洞察可能でなければならない。しかし、実在的な世界の存在については公理の場合とは話が異なる。〔2〕しかし、―考察はこのように進む―実在的世界に関しては事情が異なっている。もし想像において世界が思い浮かべられた場合には、経験的意識は、観念的な可能性として「可能的」世界に属するものである。しかし、私たちの現実的世界は可能的世界とは区別される。そして、このような現実性の性格の本質をなすものは何であろうか。どうやら現実性は経験するものであり、確かに可能性ではなく、顕在的な経験世界にある。しかしその時に、実在性は、顕在的に経験する意識を示す。その場合に、もし我々の意識を取り除くならば、我々は世界を取り除けるであろう。(ESGA8: 75　〔1〕〔2〕は筆者によるもの)

ここで重要なことは、上記の引用の〔1〕前半部と〔2〕後半部では、シュタインがフッサールの観念論的立場を再解釈している点である。フッサールの観念論的立場とは、自然主義のような「実在の外部世界を存在の自立性と見做す実在論」(ESGA8: 75)と対比されて用いられている。その場合の「観念(Ideal)」とは「時間＝空間的な因果関係」という意味での「実在/実在性(real/Realität)」とは対比されて使用される。〔1〕前半部で指摘される観念論的立場とは、対象や世界は意識によって構成されたものとして見做されている。すなわち、認識や経験に対して意識が実在している必要性がないという主張である。それに続いて、〔2〕後半部で指摘される観念論的立場では、実在世界の中に見出される対象は意識の志向性によって構成されたものであるかどうかを吟味することになる。およそフッサールが実在世界における対象の現出を意識に依拠させることは周知されている。シュタインが強調するのは、フッサールの観念論的立場では、世界や対象を実際の経験的な事柄である「現実/現実性(Wirklichkeit)」において捉えたとしても、世界や対象が意

識によって構成されているという主張である。

しかし、シュタインが上述の〔1〕〔2〕におけるフッサールの観念論的立場に反対する仕方で「感覚」の問題を取り上げている点に着目したい。シュタインは意識に依存しない感覚と感覚与件の研究を重要視している。ただし、感覚一元論を支持する感覚主義を退けている。というのも、こうした感覚主義は「感覚を唯一の実在性として考察し、すべての対象を感覚の複合体として説明する」(ESGA8: 76)からであり、その場合には世界や対象は一元化されることになるからである。ところが、シュタインは「感覚与件は経験の構築において基本的に重要であり、実在性の性質を理解したい場合には感覚与件を無視してはならない」(ESGA8: 76)と指摘する。

ただし、シュタインの分析する感覚とは一様に理解できるものではない。とりわけ、シュタインが着目しているのは、「身体的で局所的な感覚」である。

> この到達不可能な領域である意識の実的な成素に関して、感覚は最上位のカテゴリーである「体験」の特別な機能として見出される。ここでは「身体的で局所的な感覚」とそれ以外の感覚を区別しなければならない。(ESGA5: 58)

身体的で局所的な感覚とは、圧力、痛み、冷たさのような身体の或る一部分の感覚を意味している。『感情移入の問題について』では、感覚は「意識の実的な成素」と見做される。他方で、『哲学入門』では、「物体世界の因果的出来事への依存は、《感覚》の存立だけではなく、非物体的で局所化された感覚に存在する」(ESGA8: 104)と述べられる。その場合に感覚は「実在の因果連関」に依存する。このような立場の違いから経験的人の構成はどのように捉えられるであろうか。

2. 心理物理的個体の構成分析における「感覚身体」と「純粋自我」の位置づけ

本節では、『感情移入の問題について』における「心理物理的個体」の分析に着目する。シュタインは心理物理的個体を「物理的物体(Körper)」や事物と同様に経験領野に属しつつも、特有の「身体(Leib)」を具えているという点を強調している。そこで心理物理的個体に関する「感覚身体」と「純粋自我」の関係性に焦点を当てることにする。シュタインの主張には、およそ二つの論点が考えられる。第一に、心理物理的個体は、物理的物体ではなく、「自我

に帰属した感覚する身体」、すなわち「感覚する、思考する、感じる、意志する自我」(ESGA5: 13)として与えられている点である。その際に、「経験的自我」と「純粋自我」の区別が問題となる。第二に、「身体は現象的世界の方向定位の中心として、現象的世界に向き合い、私と相互に交流している」(ESGA5: 13)という点である。ここでは物理的物体とは区別される身体の特有な空間性が問題となる。上記の二点から心理物理的個体の位置づけを再検討しよう。

経験的自我と純粋自我はどのように関係するのか。およそシュタインは両者の関わりを以下の三点で考えているように思われる(4)。

第一に、経験の領野に属する経験的自我と現象学の領野に属する純粋自我は区別される。「われわれの周囲にある世界、物理的世界、物体、人間の心、動物の心(探究者それ自身の心理物理的人を含めて)は遮断あるいは還元される」(ESGA5: 11)。現象学的態度の採用によって経験の領野に属する心理物理的個体は、遮断ないしは還元されることになる。というのも、自然的態度である限りで「諸特性を具えた諸々の名前と立場を有する自我ないしは経験的自我が存在するということは不可疑的ではない」(ESGA5: 11)からである。つまり、経験的自我の存立は、懐疑的な事態として捉えられており、その限りで現象学の領野の外に置かれている。他方で、「世界と人を現象(Phänomen)としている体験そのものの主観としての《自我》ないしは《私》は、厳密な意味で疑うことができない」(ESGA5: 12)。ここでの「体験そのものの主観」としての「私」や「自我」が純粋自我を意味する(中村, 2019: 85)。この場合には、現象学の領野における純粋自我はそれ自体で存立しつつ、心理物理的個体から切り離されているといえる。

第二に、経験的自我の「個体性(Individualität)」と純粋自我の「自己性(Selbstheit)」は区別されつつも、自己性は意識流の統一によって構成されている点である。純粋自我は「質がない経験主観」(ESGA5: 54)や「性質を欠く」(ESGA5: 54)自己性であり、「《私のもの》であるすべてのものの基盤」(ESGA5: 54)として位置づけられる。その際に、「自我はそれに対して他のものが直面したことによって個体化を経験するのではなく、その個体性、我々がより好む言い方でならば(…)その自己性は他者の他者性に対して際立っている」(ESGA5: 54)。ここで問題となるのは、個体性の次元と自己性の次元が形式的に異なっている点である(Hecker, 1995: 299; 中村, 2019: 88)。「私」が「汝」や「他者」と区別されるのは、私が他の個体性との出会いによって個体化を経験するのではなく、既に他者の他者性よりも私の自己性が際立っているからである(中村, 2019: 88)。つまり、私の経験的自我と他者の経験的

自我が区別されることによって、私の自己性は成立しているわけではない。というのも、自己性と他者性は与えられ方によって既に際立った仕方で存立しているからである(ESGA5: 54)。私の自己性と他者の他者性はそれぞれの純粋自我の次元において既に個体化されており、その限りで経験的自我の次元での個体化とは区別される(中村, 2019: 89)。

しかし、上記の区別化の根拠となるのは、現象学の反省によって見出される意識流の働きである。こうした反省の遂行によって「同一の意識流は、更に《他の》意識流、すなわち《私》と《汝》、《彼》の意識流に直面する。その自己性と他者性は、《他なるもの》であるだけではなく、それぞれに特有な体験流の内容を持っているために、《様々なもの》でもある」(ESGA5: 55)。すなわち、様々な意識流は体験内容により区別されているということであり、その限りで私の意識流は「それ自体であり他なるものではないもの」(ESGA5: 55)として私の体験を性格づけていると考えられる。更に、シュタインは体験流の内容が「心(Seele)」の構造に相互依存していることを指摘する。「実質的な心」や「実体的要素」(ESGA5: 56)である心は、意識流の統一を担うものとして存立しており、体験流の特有の体験内容のうちで「私」の体験を根拠づける(ESGA5: 56)。そして、「個々の心的体験に告知される実体的統一体としての心は(…)身体に基礎を置き、それと共に、心理物理的個体を形成する」(ESGA5: 56)。このような心が身体に依存することによって、実在化された心理物理的個体が構成される。

第三に、私の身体は感覚を通して、純粋自我とは区別されつつ相互に交流している。

> 圧力、痛み、冷たさの感覚は判断、意志、知覚の体験等々と同様に、絶対的な所与である。しかし、あらゆる作用(Akt)との関係において、感覚は独特の仕方で特徴づけられる。感覚はあらゆる作用のように、純粋自我から湧き出ることはなく、自我は対象に向けられるコギトの形式を取ることは決してない。私は決して―そこへと反省するものとして―対象の中に自我を見出すことができない。むしろ感覚は、常に「どこか」にあり、空間的に局所化されて、自我から遠く、もしかしたら自我に非常に近いかもしれない。しかし、自我の中には決してない。そして、このような「どこか」は決して空間の空虚な場所ではなく、空間を充たすものである。そして、私の感覚が生じるこのようなすべてのものは、統一へ向けて結合し、すなわち私の身体の統一として結合し、それ自体が身

体の位置である。(ESGA5: 58)

まず着目したいのは、身体の位置づけである。ここでは、身体を「現象的世界の方向定位の中心」と見做したシュタインの意図を読み取ることができるであろう。「現象的世界の方向定位の中心」とは、私の身体が様々な感覚の経験を通して、現象的世界の中心である「今ここ」の担い手として位置付けられることであり、その際に、空間化された対象が、身体へと向けられた仕方で定位されて現出してくることを意味している。更に、シュタインは「私の身体」を「方向定位の零点」(ESGA5: 58)と言い換える。この方向定位の零点は、「幾何学的に正確に私の身体の場所にあるのではなく、すべての与件として同じであるわけではなく、視覚与件では頭に、触覚与件では身体の中心に配置されている」(ESGA5: 58)。すなわち、感覚与件は、方向定位の中心としての私の身体から「遠さ」や「近さ」という仕方での「距離」(ESGA5: 58)において位置づけられる。たとえば、「私が手に持っている石が手そのものと同じように零点から遠いあるいは、《ほんの少し遠い》ということはありえない」(ESGA5: 59)。つまり、私が手に持っている石と私の手そのものの近さや遠さは、私の身体から同じ距離ではない。方向定位の中心である私の身体は、物理的物体としての私の一部分(＝四肢)や物理的事物からは空間化された距離において区別されていると考えられる。

次に着目したいのは、純粋自我の位置づけである。シュタインは「自我は零点から距離を持たない」(ESGA5: 58)や「自我のない身体は全くの不可能性」(ESGA5: 64)であると指摘する。そして、私の身体は純粋自我の束縛性において物理的物体から区別される。

自我に見捨てられた私の身体を想像することは、もはや私の身体ではなく、次第にそれに類似している物理的物体や私の死体を想像することを意味する。(私は私の身体から離れることによって、身体は私にとっては他なるものと同じ物体になる。そして、もし身体から私を遠ざける仕方で考察するならば、(…)このような遠さは「自己移動」ではなく、純粋な物体運動である)。(ESGA5: 64)

ここで重要なことは、私の身体が純粋自我に束縛されている点である。もし私の身体に純粋自我が帰属していなければ、物理的物体や死体でしかない。この点において、純粋自我に帰属する感覚身体が、物理的物体ではなく、身

体として与えられていることの根拠となっている。

最後に着目したいのは、感覚の位置づけである。先述の引用では、感覚は純粋自我に由来していないということが読み取れる。その場合には、感覚は意識の実的な構成要素ではなく、自我に帰属していない限りで物体にのみ関わるはずである。しかし、別の箇所では「身体は本質的に感覚によって構成されており、感覚は意識の実的な成素であり、このような身体は自我に帰属している」(ESGA5: 64)と述べられている。その場合に、意識の実的な成素である感覚によって純粋自我に帰属した身体が構成されている。シュタインは前者を「外部知覚」と後者を「身体知覚」と見做している。ただし、「私の身体は感覚(身体知覚)身体と外界を外部的に知覚する物体という二重の意味で構成されている」(ESGA5: 59)。私の身体にはこの二重の感覚の構成要素が不可欠である。というのは、私の身体は零点と空間化された対象の位置によって形成されるからである。

更に、シュタインによれば、自我と身体を結び付けている「心理物理的因果関係は、心理物理的個体を実在化するために使用された表現である」(ESGA5: 71)。しかし、シュタインは、自然的実在の因果連関が心理物理的個体を構成するだけではなく、他方で、心理物理的個体を客観構成しているのは「精神(Geist)」であると指摘する。

> 意識は我々に因果的条件の生起としてだけではなく、同時に、客観構成するものとして示され、それによって、意識は自然の連関から自然に対して歩み出る。客観世界の相関者としての意識は自然ではなく、精神である[5]。(ESGA5: 108)

この精神とは、心理物理的個体を客観構成するものであり、客観世界の相関者としての意識である。精神の領域とは、精神科学の問題に由来する歴史、文化、価値の世界を意味しており、その限りで心理物理的個体は、因果性とは異なった「意味法則」によって客観構成されている。つまり、自然と精神の領域の間で「経験的人が《自然》としては因果法則に従属し、《精神》としては意味法則に従属する」(ESGA5: 129)。それゆえ、心理物理的個体は、自然と精神によって二重の仕方で規定される経験的人として位置づけられているといえる。

3. 自我生命の構成分析における「感覚身体」と「純粋自我」の位置づけ

本節では、『哲学入門』における「自我生命」の分析に着目する。シュタインは、自我生命を「対象世界に相関する主観あるいは意識」(ESGA8: 101)もしくは「絶対的個体性」と言い換える。そして、自我生命の多義的な性格の中で「際立った性格(ausgeprägter Charakter)」(ESGA8: 103, 132)を個性の本質として捉えている。シュタインは、このような自我生命を実在世界に属する「身体と心の統一体として《合成された実在性》(zusammengesetzte Realität)」(ESGA8: 102)と捉える。そこで着目したいのは、自我生命の感覚的特性、すなわち外面的な身体の特性である。『哲学入門』では、身体は外部環境の影響下にある「身体物体(Leibskörper)」という物体的側面、とりわけ「感覚身体」が重要となる。身体物体とは「人と空間世界の間の《媒介者》の役割」(ESGA8: 102)を意味する。シュタインは、身体物体の媒介性ないしは二重の能力を強調する。第一に、身体はその感覚器官を通して他の感覚器官に外部刺激を伝える。第二に、物体としての感覚器官は空間世界からの刺激に対する効果を発揮する。ただし、「我々は身体物体が主観や個体の意識へ束縛された状態で、(…)それを身体として特徴づけている」(ESGA8: 115)ために、意識の形式である純粋自我との関わりにおいて捉えられなければならない。しかし、『哲学入門』では、純粋自我が二つの位相において位置づけられているように考えられる(5)。

第一に、実在世界とは対立する純粋意識の形式としての純粋自我である。

> 遮断や還元の実行後に残余している自我は、体験の主観に他ならず、何の属性も有していない、実在的条件にも従わない。それは体験が自我から放射されて、自我の中に生きること以外には何も言えないものである。我々はそれを純粋自我と名付ける。純粋自我は心理状態のような実在世界の一部ではなく、世界に対立している。(ESGA8: 21)

ここで指摘されるのは、現象学的還元を遂行した後に残り続ける自我の構造である。このような自我は実在世界に対置されるゆえに実在的条件に従っていない。このような実在の個体や心理状態を具えていない限りで、上述の純粋自我は、経験的領野に属している自我生命とは言えないように思われる。

第二に、実在世界に帰属した自我生命の構成要素としての純粋自我である。ここでの純粋自我は「絶対的個体」としての意識の形式を有する。。

> 我々が人を自我生命の主観として考察するならば、純粋自我からは区別

> されない。純粋自我は体験の源泉であり、この体験の目標点である対象に向かって放射する出発点である。我々は純粋自我を特有の意識の形式と呼ぶ。(ESGA8: 104)。

すなわち、純粋自我が実在世界に帰属する身体物体を有した自我生命とは切り離されていない点である。シュタインは、第二の意味での純粋自我は変動する意識のもつ二つの「極」の間における質が同じではないと指摘する。ここでの純粋自我は「覚醒している意識」や「朦朧としている意識」もしくは「鈍い意識」が絶え間なく流れる意識の統一性でありつつ、自我の形式を保持していることを意味する。こうした純粋自我によって自我生命を捉えるならば、純粋自我は、それ自体として独立しているわけではなく、身体物体から切り離されているわけではない。

第三に、シュタインは、純粋自我の意識の働きに基づかない感覚身体において「身体的で局所的な感覚」の二重の側面を実在的自然との認識関係で捉える。第一に、感覚は「実在の因果連関」(ESGA8: 116)に従っている。たとえば、「u を物体世界における出来事、それによって v が身体物体の状態性の結果となる場合には u と v は、同様に常に、物体的出来事を意味している」(ESGA8: 116)。身体物体の状態は外部刺激のような物体世界の出来事に影響されるゆえに身体物体と物体世界には因果連関が成立している。第二に、「他の物体の圧力によって私の手が変化する場合には、私の身体の部分に圧力感覚や痛覚が生じる」(ESGA8: 116)。その場合に、身体は、身体的で局所的な感覚によって生じてくる感覚の刺激を感じる。それゆえ、外部環境からの影響によって受ける刺激と同時に、身体の局所的な感覚に生じる刺激を感じるという二重の感覚が生じていると考えられる。

おわりに

本論文では、シュタインにおける経験的人の構成分析を『感情移入の問題について』と『哲学入門』における「感覚身体」と「純粋自我」の関係性から再検討するものであった。とりわけ、フッサールとシュタインの構成概念に関して言及した。フッサールの構成分析では、「因果性」が意識によって構成されているという構成理念の下で経験的人は意義付けられる。しかし、シュタインの構成分析では、経験的人が広範囲に渡って因果性によって構成されつつも、客観的世界の相関者である精神によって客観構成されている点は重要である。この点において、両者の構成分析には異なった点が見られるで

あろう。そして、シュタインの構成概念が意味しているのは、およそ多義的であるように思われる。(1)超越論的意識によって対象が構成される。(2)意識によって対象が構成させると同時に、意識を客観化しつつ構成する。(3)認識主観と認識対象の認識過程を説明する構成である。上記の三点はシュタインにおける「感覚身体」と「純粋自我」の関係性から読み取れるであろう。『感情移入の問題について』では、(1)現象学的還元を通して、自然的態度において一般的に定立される実在的なものが遮断される過程が指摘される。そして、(2)感覚身体は「現象的世界の方向定位の中心」と見做され、実在的自然や対象を空間化し、意識の実的な成素である感覚を通して、身体に純粋自我が束縛されるという仕方での自己構成が指摘される。他方で、『哲学入門』では、(1)の点は『感情移入の問題について』と同様な視座を有している。しかし、(3)感覚身体は、身体的で局所的な感覚によって自我生命の物体的側面として意義付けられる。そして、感覚身体と実在的自然の関係は、純粋自我とは結びつかずに実在の因果連関のうちに意義付けられることは重要である。両著作の間の移行において、『感情移入の問題について』では、感覚は意識の実的な成素であるが、『哲学入門』では、感覚は実在の因果連関に基づくものである。その限りでシュタインの思惟は、実在論的方向性へと推し進められていると解釈することができるであろう。

しかし、本論文では、経験的人の構成要素としての心や精神に関して些か不十分な指摘に留まった。経験的人の構成分析をさらに明瞭にするためには、「心的生命」や「精神的人格」との関わりについて言及しなければならないであろう。

注

(1)これまでの経験的人の分析に着目したシュタイン研究では、『感情移入の問題について』における「心理物理的個体」の分析を中心に議論されてきた。シュルツ(2008)は、人間の個体性を構成する純粋自我、意識流、心、身体の四つの側面があることを指摘している(Schulz, 2008： 165)。中村(2019)は、心理物理的個体が因果性の支配を超えた精神の領域に差し向けられたものであると示唆する（中村, 2019： 87-95)。

(2)経験的人は、心理物理的個体、経験的自我、自我生命、人間的人とも言い換えられる。個体的人の本質分析に関しては以下を参照せよ。Moran, 2017:43-44.

(3)『イデーンⅡ』における「自我-人間」の概念は以下を参照せよ。Ⅳ： 93-

97.

(4)ベースハート(2010)の研究は、経験的自我と純粋自我の区別化の分析を行っている(Baseheart, 2010: 32)。ヘッカー(1995)や中村(2019)は、経験的自我の個体性と純粋自我の自己性の区別化に言及している(Hecker, 1995：299-300; 中村, 2019： 87-89)。

(5)中村(2019)の翻訳を参照した(中村, 2019： 95)。

(6)ヘッカー(1995)の研究では、『哲学入門』の純粋自我の位置づけが実在世界に属していることは言及されている(Hecker, 1995： 299)。しかし、その根拠は指摘されていない。

凡例

第一次文献:シュタインの著作に関しては、エディット・シュタイン全集(Edith Stein Gesamtausgabe)からの引用は ESGA と略号を使用し、巻数と頁数を記載した。フッサールの著作に関しては、フッサール全集(Husserliana)略号を使用し、巻数と頁数を記載した。それぞれ引用・参照は()、引用文の補足は引用文の中に〔〕において補足した。それぞれ翻訳のある著作は適宜参照した。特に、シュタインの博士論文『感情移入の問題について』の訳出に関しては、中村(2019)を参考にした。

第二次文献:著者名、出版年、頁数の順番で記載した。

参考文献

第一次文献

Husserl, Edmund(エドムント・フッサール)：

〔Ⅲ/Ⅰ〕：Ideen zu einer reinen phänomenologischen Philosophie, hrsg.v. W.Beiemel, (1979).(エドムント・フッサール(1979)『イデーンⅠ-Ⅰ』(渡辺二郎訳)みすず書房. エドムント・フッサール(1984)『イデーンⅠ-Ⅱ』(渡辺二郎訳)みすず書房).

〔Ⅳ〕: Ideen zu einer reinen phänomenologischen Philosophie,Zweites Buch, hrsg.v. W.Beiemel, (1952). (エドムント・フッサール(2001)『イデーンⅡ-Ⅰ』(立松弘孝・別所良美訳)みすず書房、エドムント・フッサール(2009)『イデーンⅡ-Ⅱ』(立松弘孝・榊原哲也訳)みすず書房).

Stein, Edith(エディット・シュタイン)：

〔ESGA5〕：Zum Problem der Einfühlung (2. Aufl. 2010).

〔ESGA8〕：Einführung in die Philosophie (2. Aufl. 2010).

第二次文献

Baseheart, Mary Catherine(2010), “Person in the World: Introduction to the Philosophy of Edith Stein” (Contributions to Phenomenology 27), Springer.

Hecker, Herbert(1995), „Phänomenologie des Christlichen bei Edith Stein: Studien zur systematischen und spirituellen Theologie“, Würzburg.

Moran, Dermot(2017), “Edith Stein’s Encounter with Edmund Husserl and Her Phenomenology of the Person, Empathy, Sociality, and Personhood: Essays on Edith Stein’s Phenomenological Investigations”, Springer, pp.31-47.

Schulz, Peter J(2008),(trans. Christina M. Gschwandtner), “Toward the Subjectivity of the Human Person; Edith Stein’s Contribution to the Theory of Identity”, American Catholic Philosophical Quarterly 82, pp.161-176.

ダン・ザハヴィ(2017),『フッサールの現象学』,(工藤和男・中村拓也訳), 晃洋書房.

中村拓也(2019),「深みな自我:『感情移入の問題について』におけるエディット・シュタインの自我論」,『文化學年報』,同志社大学文化学会第 68 号, 79-100 頁.